

琉球大学学術リポジトリ

宮古戦後文学史と小説「阿母島」

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2021-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48200

宮古戦後文学史と小説「阿母島」

仲 程 昌 徳

1、宮古島戦後文学史概説―仲宗根将二の仕事

宮古で発刊されている文芸雑誌に『宮古島文学』がある。

二〇〇八年に創刊された雑誌で、その第二号に仲宗根将二は「戦後初期宮古の文芸活動―「文化立島」を目指した若ものたち―」と題した論考を発表している。第三号には仲宗根の論考が見られず、飛んで第四号に「戦後宮古の文芸活動（3）―激動の一九六〇年代をへて―」が掲載されている。第四号の数字（3）は、番号のふり違いではないかと思う。この（3）は、第二号に掲載された論考の続きとして振られた番号だろうが、（2）の数字が見当たらないのである。それからすると、第二号の論考は（1）（2）ということになる。第五号には「戦後宮古の文芸活動（4）平良好児と『郷土文学』」が掲載されている。

仲宗根の論考は、それで完結している。宮古の戦後文学の動向は、少なくとも『郷土文学』の終刊時まで、これで尽くされているのではないかと思う。

仲宗根の仕事は、宮古の戦後文学史を構築するということだけにとどまらず、多方面にわたっているが、ここでは『宮古島文学』に連載した論考を中心に、彼の仕事を振り返ってみたい。

仲宗根は、一九七九年十一月『郷土文学』第二十五号に「戦後初期の文芸活動―本村武史のあゆみをとおして―」と題した論考を発表していた。そして一九八三年からは七月発行『八重干瀬』第三号に「戦後宮古の文芸運動（上）」、第四号（一九八三年十二月）には「戦後宮古の文芸運動について（下）」、一九八四年十一月発行第五号『八重干瀬』

に「本村武史の時代小説素描」、一九八八年三月、第八号に「戦後初の雑誌『文化創造』」、一九八八年十二月第九号に「戦後宮古二番目の文芸誌・文芸旬刊」、一九八九年十一月、第十号に「民政府主唱で創刊した総合雑誌『宮古文化』」を発表していた。

また、出版物一般についても、一九八五年三月刊行された『平良市史』第六巻資料編4に「出版物に関する資料（解題）」を執筆するといったように、宮古の戦後の表現活動について精力的に調査し、まとめていた。

『郷土文学』そして『八重干瀬』といった雑誌からわかるように、一九七〇年代に始まった宮古の戦後文学に関する論考が、一九八〇年代には『八重干瀬』を中心に発表され、二〇一〇年前後になると『宮古島文学』を拠点として発表していたのである。

仲宗根は、宮古における文芸活動に関する論考の集成を、『宮古島文学』で目指したといっている。『宮古島文学』の論考を仲宗根の戦後宮古文学研究の総決算とみなすこともできるのではないかと思う。

それは、『宮古島文学』の各号に発表した論考の「付記」を見てもわかる。例えば第二号に発表した論考の「付記」には「本稿は二〇〇七年四月六日〜七月六日までの十回『宮古毎日新聞』文化欄に掲載したものである」とある。四号の「付記」では「本稿は、宮古文学同人の要請で『八重干瀬』三号（一九八三・七）、第四号（一九八三・十二）の上・下二回にわたって『戦後宮古の文芸運動』と題して発表したものである」と書いていた。同じく、第五号では「はじめに」で「本稿は好児主宰の『郷土文学』について、その節目ごとに請われるままに執筆した小論の集成である」と書いていた。

仲宗根の宮古の文芸雑誌研究といってもいいかと思うが、それが、いつ頃から始まったのか、その細かいいきさつについては、これからの調査をまたないといけないが、そのような仲宗根の地道な作業がなされていたことで、

宮古の戦後文学の歩みが、よくわかるようになっているのである。

もちろん、宮古の戦後文学について論じたのは、仲宗根だけでなく、他にもいわけではない。例えば、『八重干瀬』と「文化活動」(『郷土文学』第47号、一九八五・五)、「高揚期を迎える文学風土」(『新沖縄文学』61、一九八四・九)、「文学主体をどこにおくか」(『八重干瀬』第10号、一九八九、十一)や「出版物に関する資料」で「雑誌」の部を担当している宮川耕次、「戦後の文化活動と現状」(『新沖縄文学』61号、一九八四・九)の論考がある砂川幸夫といった人たちがいた。

宮川耕次は、彼が活動した『八重干瀬』(一九八四・十一)第三号で「特集・戦後宮古文学の歩み」を企画、伊志嶺亮、友利恵勇、砂川玄徳の三人が出席、司会を編集部が担当し、座談会を行っていた。座談会は、宮古で戦後刊行された文芸雑誌の歩みと個々の雑誌によって活動した人々について取り上げていた。それによると、終戦直後から一九四八、九年にかけて「宮古の第一次文芸復興期みたいなもの」(伊志嶺)があったということや、一九五六年ごろには「宮古文壇でも双壁だと言われていた松原清吉さんと松下仁(吉村玄徳)さん」がいたといったことなどが話し合われていた。また創刊号では「宮古の文学を考える」文学不毛を乗りこえて」を特集していた。

特集や座談会は、宮古の戦後文学史を充実させていく大切な資料であり、それらを仲宗根の仕事に重ねていくことで、宮古の戦後文学の歩みがさらに膨らみのあるものとなっていくに違いない。

ここで再度、仲宗根の論考によりながら、敗戦後から一九九一年までの、宮古の戦後文学の歩みをまとめていくと、だいたい次のように、三期にわけてみるることができるのではないかと思う。

第一期は、敗戦後から一九五〇年前後ごろまでである。

『文化創造』『文芸旬刊』『宮古文化』『文芸』さらには『防犯』『学生』『郷土研究』などの雑誌が刊行された時期

である。伊志嶺が「宮古の第一次文芸復興期みたいなもの」（伊志嶺「座談会」『八重干瀬』三号）であると指摘していた時期で、「戦後における文芸活動は、沖縄本島や八重山より比較的はやかった」ともいわれているが、「しかし、この時期の文芸誌や団体機関誌、新聞は短いもので数ヶ月、長いものでせいぜい三年そこらであらかた停刊、もしくは廃刊している」（仲宗根）といったような状態であった。

この時期活躍した人々の名前を各ジャンルから一人ずつあげればとして、仲宗根は「小説では本村武史、詩では克山滋、短歌では石原昌秀、俳句では国仲穂水、評論では平良好好児らがあげられよう」としていた。

仲宗根は、「戦後初期宮古の文芸活動」という場合の「戦後初期」とは、一応一九四五年八月の敗戦から、五二年三月「琉球政府」発足前夜までを想定している」といい、その時期を第二期としているが、『文芸』の創刊即停刊「以後宮古での文芸活動は一定の停滞期に入る」（『八重干瀬』三号）、——のち「一定の沈滞期に入った」（『宮古島文学』）——と「停滞期」を「沈滞期」にいいなおしていた。いずれにせよ、『文芸』が「停刊」したあとは、一時、文学の空白期がみられたということである。

第二期は、『あざみ』の創刊された一九五八年ごろから一九六六年『群』の活動停止までの時期である。

『群』の活動が終息した一九六六年から、一九七三年十月『郷土文学』が創刊されるまでの七年あまりの期間、再度、文学活動の停滞期に入ったといわれている。仲宗根は、一九六六年から「一九七三年十月『郷土文学』創刊までの七年有半を、宮古における何期目かの空白期間とみる向きもある」が、俳句界や短歌界さらには「エッセイと随筆」界に関していえば、そうともいえない、とされていた。

第二期の出版を告げた『あざみ』の創刊号を飾ったのは砂川玄德、大宜見修平、本村武史、松下仁たちである。創刊号は百部、「広告主と読んでくれそうな方々にすべて配布、また那覇に出たおり「当時早くも、沖縄文学をリ

ドしていた大城立裕、池田和（故人）らをたずねて、批評を乞うたりしたという。しかし『あざみ』は、「苦勞のわりには記憶に残るほどの評価はうけなかった」という。

五七年には沖繩タイムス社の初代専任宮古支局長として赴任してきた川満信一から「手書きの詩集でもだそうか」という声が出て、出来上がったのが『カオス』であった。「創刊号と銘打ったということは、当然のことながら二号、三号と続刊を想定していたに違いないが、「明けて一九五九（昭和三十四）年三月、川満大兄がコザ支局に転勤したこともあって、自然と停刊してしまった」（仲宗根将二「詩集「カオス」への回想『琉球・島之宝』二〇一四）という。

一九六一年には『あざみ』を改題し『宮古文学』通巻第三号として発刊。しかし三号雑誌で終わってしまう。

一九六五年『群』創刊。「創刊号は宮古では久しぶりの文芸誌とあってか、好評であった」という。いくつもの雑誌がとりあげてくれたなかで『人民』（204号、1966・1）は「この同人誌は宮古の農民闘争に取材した抑圧された島の人びとの歴史をテーマにした創作、小説、ルポルタージュ、戯曲などでうめられ、これまでのびなやんでいた文学創作活動の突破口をきりひろくものと期待されています」といった好意的な評を出していたと紹介している。

しかしその『群』も、翌六六年第二号を出したあと活動停止。文芸活動はまたもや「空白」期を迎えることになる。第三期は、一九七三年十月『郷土文学』の創刊から一九九六年終刊を迎えるまでの期間である。この期間の宮古の文芸活動は『郷土文学』と『八重干瀬』に代表されて展開して「いくことになる」。

『郷土文学』は、第二十一号で「五周年目を迎えた郷土文学」土着の叙情の開花目指す」として活躍中の表現者たちからの祝福の言葉を掲載、第四十号では「郷土文学十周年」、五十号では「郷土文学五十号に寄せて」、第六十

号では「郷土文学 60号の軌跡」、第八十号では「郷土文学第80号に寄せて」、第九十号では「90号に寄せて」といったように、節目ごとに小特集をしていた。

三号雑誌といういいかたがなされるように、地方で刊行される同人雑誌は、創刊されてはすぐに消えてしまうのが通常だとされているなかで、『郷土文学』は異例の号数を重ねてきた同人雑誌であった。砂川玄徳は「90号によせて」で、雑誌を主宰している平良好児の人柄にふれ、「他人を感動させる」人であると書いていた。雑誌を持続する平良の志は、砂川ならずとも感動的であるといえるが、『あざみ』『カオス』『群』『八重干瀬』と、四つの同人誌に関わりながら、いずれも三号誌の憂き目を味わつてきた」砂川には、とりわけそうだったといっている。

平良好児は、「郷土文学」の主宰者としてだけでなく、仲宗根がいうように「戦後宮古の文芸活動を語る上で欠かすことのできない」一人であった。「文化創造」を生み出し、「郷土文学」の灯をともし続けて、「この戦後三十八年の長きにわたる過程で何らかの影響を受けなかった人はいないといってもよいだろう」と仲宗根はいう。そしてその影響力の強さについて触れ、「宮国泰誠、池村泉城、大山春明、下地明増の世代から、伊志嶺亮や真栄城功、友利恵勇、友利敏子、友利昭子の世代、さらに新しくは一九八二年七月誕生した『八重干瀬』に拠って歩みだした宮古文芸同人の宮川耕次らにしても同様である」といい、さらに「一九五八年『あざみ』以来の砂川玄徳、一八七七年個人誌『宮古散文学 土くれ』を刊行した小祿恵良もいる」というように、戦後宮古で文芸活動を担った者で、平良の影響を受けなかった者はいなかったと回想していた。

仲宗根は、戦後宮古の文学活動を締めくくるにあたって、宮古の文学活動は「このさき『郷土文学』と『八重干瀬』に代表されて展開していくであろう」と述べていた。その『八重干瀬』が終刊したのが一九九一年五月、『郷土文学』の終刊したのが一九九六年二月である。

『郷土文学』以後、どのような同人雑誌が刊行されてきたのか明らかではないが、一つだけ言えることは、二〇〇八年七月『宮古島文学』が創刊されたことで、宮古の文芸活動が、再び燃え上がったのではないかと思われる。幾度かの高揚期そして停滞期をへて、少なくとも四期目の活動期にあたるといっていい現在、注目すべき表現者たちが、宮古はいうにおよばず、沖縄の表現活動を大きく動かしているのは確かである。

宮古の戦後文学の第四期目、『郷土文学』終刊後の活動については、仲宗根将二の仕事を引き継ぐかたちになるであろう。しかし、仲宗根の文学史の仕事は、それぞれの時代をともに歩いてきたという実感的できわめて思い入れの強い、そして、細かいところまで丁寧に拾ってなされたものであった。それだけに、仲宗根の仕事を引き継ぐのは簡単なことではないはずである。

仲宗根の宮古の戦後文学史について、もし、付け加えるべきものがあるとすれば、次の二点ということになるであろう。

一つには、仲宗根があげていたそれぞれの同人誌に掲載されていた作品についての研究であり、あと一つには、仲宗根の論述からもれていた表現者についての論究、といったことである。

二点目については、仲宗根もつとに気づいていて、「戦後三十余年、宮古にも少なくない文人墨客がおとずれている。また宮古出身で、宮古外で小説、評論、とりわけ詩歌の分野で精力的に創作活動をつづけている人は多い。これらの人びとの動向が宮古にとって無関係であろうはずはないのに、本稿ではまったくふれることができなかった。片手落ちのそしりは免れまい。他日を期したい」（戦後宮古の文芸活動と激動の一九六〇年代をへて）『宮古文学』第4号）と書いていた。

そのように、宮古外で活動していた表現者たちに関して、仲宗根は気になりながら扱っていなかったのである。

本稿は、仲宗根が気にしながら触れてなかつた宮古を離れて活躍した宮古出身の作家のひとりを取り上げて見ていくことにする。仲宗根のいう通り、宮古出身で、宮古を離れて活躍している表現者は多いし、「とりわけ詩歌の分野で精力的に創作活動をつづけている人」が多いのだが、ここでは宮古の文学の特質のよく出ていると思われる小説をそれも一編だけとりあげて、仲宗根将二の宮古戦後文学史の仕事にほんの少し色どりを添えてみたい。

2 譜久村雅捷の「阿母島」

宮古外で活躍した宮古出身の作家のひとりに、「譜久村雅捷創作集 阿母島（あんなじま）」の著者譜久村雅捷がいる。

譜久村は、一九七六（昭和五一）年、逝去。一九七八（昭和五三）年七月、「恩師、先輩、知友、同期生、奥さんの協力を得て」（垣花豊順「雅捷兄への最後の送り物」）「遺稿集」が刊行されているが、それに、一九六八年から一九七五年の間に書かれた作品八編が収められている。八編はいずれも、宮古の離島多良間島と関わりのあるものだが、そのなかでも、ここで取り上げたいと思っている作品で「遺稿集」の題名ともなった「阿母島」は、多良間島の近代史と関わりのある出来事を扱っていた。

作品は、実際にあつた出来事を踏まえていた。譜久村の作品の持つ魅力の一つは、多良間島の歴史が映し出されているといった点にあるが、作品は、もちろん、史実そのままであるというわけではなかつた。史実は、作品の制動機をなしているにすぎない。

「阿母島」は、一九六八年八月『新沖縄文学』第10号に掲載された作品である。内容は、一言でいえば、小学校の新築をめぐる物語で、「明治二十九年二月」の小学校校長の着任から「明治三十一年一月十九日」の小学校校舎

落成式までの二か年間の出来事を扱ったものであった。

「明治二十九年二月のある朝」、多良間村長・佐久田昌章は、上機嫌で登庁する。上機嫌の理由は二つあって、その一つは、「小学校校長が着任した」こと、あとの一つは「六か月ぶりに親類や友人の手紙がどつと届いた」といったことにある。

小学校には、これまで校長先生がいなかったのである。「校長が居なくて、管理は村役所に委され」ていて、村長が学校の運営にあたっていたのだが、十分に手を尽くすことができないので「沖繩県庁にお願いしたところ」その願いがかなったのである。村長が上機嫌になったのも当然というものであった。

上機嫌で登庁した村長を訪ねてきたのは、村長が「酒造りを頼んであった」長嶺爺さんである。村長が、「畑仕事はどうですか」とたずねたところ、今年は大豆（げだいず）も小麦も順調だが、吉川（ゆすか）の屋真（やま）にはかなわないといい、彼の話になっていく。彼は、お産が近い嫁のカマドが男の子を産まないといって折檻するので、それをなだめるのに、一苦労した、といった話をしたあと、「酒垂り（しゃきたり）」を見にいかないと村長をさそい、行った先で味見ということになる。「午前十一時ごろだが、村長と爺さんの二人は座敷に上がって」呑み始めた、というのである。

作品のはじめの部分を、幾分こまかく紹介したのは、ほかでもない。それだけで、島が、簡単に行き来できるようなところではない孤島であること、もめごとと言っても、男の子を産まない妻に夫がやつあたりしているといった程度で、いたってのんびりした島であることが、すぐに分かるようになっていからである。

作者は、もちろん、想像上の島を作り上げることもできる。多良間のようだが多良間ではないといった作者自身の島を作り上げることもできるわけである。しかし、譜久村は、そうはしていなかった。実在する島を扱っている

のだが、実在している島を扱うからといって、島をそのまま映しだしていくだけで、小説になるわけでもなかった。そこには、さまざまな工夫がなされていくことになるが、その工夫の一つが、まず村長さんを前景化することであったということである。

数か月ぶりに届く手紙、下大豆や小麦といった農作物、男の子を産まないといって妻に不満をぶつける男、そして自家製の酒を造り、目の前にある海でとれたタコの燻製を肴にして、酒盛りを昼前からはじめてしまう、といった村長さんを中心にした描写は、まちがいになく島の雰囲気を作り上げていくものとなっていた。

作者はそのあと、村長を上機嫌にした校長の着任歓迎会の模様を描いていく。

歓迎会は、村長の挨拶で始まる。そして乾杯のあと、校長の着任挨拶になる。校長は、まず、この島に赴任と決まったとき、「島流しされたと落胆した」といい、この島に着いた時にもそう感じた、と話をきりだす。

「島流し」は、多良間に伝えられている伝承と切っても切れないものがあつた。『たらま島 孤島の民俗と歴史』（昭和四十八年五月）によると、「平敷屋朝敏が安謝港で死刑された事件は、史上有名であるが、このとき、長男の朝良は多良間島に、次男は与那国に、三男は水納島に流刑された。三男は幼少でもあつたので、多良間島の長男がひきとつて養育したが、夭折したといわれている。／朝良はナカット（高原家）の嫁をとつて一家をたてた」とあり、さらにその子孫及びその関係者が葬られた墓についても触れていた。多良間は流刑地として、よく知られた島であつた。

校長の着任挨拶は、島に伝わる古事を思い起こさせる形で始まっていた。そのような歴史に包まれた島であるだけでなく、「六か月ぶりに親類や友人の手紙がどつと届いた」といった孤島への赴任は、校長ならずとも、都落ちの感を深くしたに違いないのである。しかし、校長の挨拶は、島流しされたような気持であるといった話だけで、終

わっていたのではない。

そのあとで、道路に落ちていた鎌を拾った子供が、「その鎌の柄を紐でくくり」木の枝にぶら提げるのを見たこと、年配の農夫が、その鎌を見つけ、おし頂いていたこと、話を聞くと、「昔からの習慣である」といったこと、さらに出会う人ごとに挨拶を交わしているのを見て「一躍、良い島に来たと思う」ようになったといい、「美しい心の方々と共に生活するのは、思っただけでも嬉しいことあります」と、締めくくっていた。

ここまでの概略で、作品の背景をなす島の様子があらかた見えてきたのではないかと思うが、もう少し、作品の展開を追ってみたい。

島では、いろいろなことが起こっていく。それをひろい上げていくと、

- (1) 歓迎会の翌日、吉川屋真の家で、安産祈願が行われる。
 - (2) 三月になると、小学校の卒業式と終業式が行われる。
- その後、
- (3) 学籍簿の記載の話。
 - (4) 言葉の問題。
 - (5) 島の呼称に関する古事。
 - (6) 上納の話。
 - (7) 小学校の新築に関する集会。
 - (8) 神山の福木を切る話し合い。

- (9) サニツの行事。
- (10) 子守りの話。
- (11) 台風の来襲。
- (12) 密航者の上陸。
- (13) 校長住宅新築の話。
- (14) 春雷。
- (15) ウプリ。
- (16) アサリ。
- (17) アダン林でのこと。
- (18) 小学校校舎の完成。
- (19) 「あだんやーぬあず」大合唱。

といったようになる。

作品は、そのように一九のエピソードをつないで出来上がっていて、そのエピソードが、作品をしつかり支えているといったかたちになっている。そのすべてについて触れることはできないが、例えば、(4)のエピソードなど、多良間を語る場合、落とすことのできないものであった。それは、宮古本島からやってきた村長さんと東京からやってきた校長との間で交わされる多良間の言葉についての場面であるが、彼らの話は、柳田国男が「言語生活の指導」で語っていた「多良間島の一秀才の話」を、思い起こさせるものであった。作者はそのことについて、とくに触れ

てないが、村長さんや校長以上に、島を出ていかざるを得なかった人々は、言葉で苦勞していたのである。

また(10)の小学校二年生で「子守り」役を勤める女の子の話、(11)の「海鳴り」の話などはとりたてて島を誇るような慣習、伝承であるわけではないにしても、作品のリアリティーを高めるものであることはまちがいない。作品は、島の生活をこまごまと照らし出していく中で、小学校の校舎建築という大切な計画が進行していく様子を描いていく。小学校の校舎建設については史実に記されているが、しかし作品は、史実そのままを描いていたのではなかった。

多良間尋常小学校は明治二八年度、始めて卒業生を送り出す。『多良間村史』を見ると、卒業生を出したもののその「校舎は茅葺で雨が降れば漏り、台風が来れば屋根が吹き飛ばされるやら吹き倒されるやらで修理の繰り返しとなり、敷地は低いために雨後は水溜まりや泥が多く、不自由極まる状態にあった」ことで、「明治二九(一八九六)年五月赴任した進藤栄訓導はその状態を身をもって知り、職員に諮り、村頭伊良皆春応、村雇下地春敷、美里春仁、学務委員渡久山春知、勸業委員上地玄常、津嘉山春祐、駐在巡查森弥兵衛、その他の有志、二才頭等を交えて協議し、明治三〇(一八九七)年から校舎改築の請願を繰り返し、明治三三(一九〇〇)年から材木伐採工事を起こし、元塩川村番所跡第一番地に校舎建設を開始し、明治三五(一九〇二)年一月九日瓦葺き校舎が落成し、一九日に落成式を兼ね御眞影奉戴式を挙行した」(『多良間村史 第一巻通史 島のあゆみ』平成十二年三月)とある。

新校舎の建築が、進藤栄校長の着任後始まったことは、史実その儘である。しかし、その時の村頭は、作品に登場していた佐久田昌章ではなかった。佐久田は一九一三年から一九一六年まで、すなわち大正二年から大正五年まで務めた村長である。実際は伊良皆春応であったのだが、伊良皆ではなく、佐久田昌章になっていて、史実とは異なっていたのである。

なぜ史実を変えたのか、といった問題が、ここにはあつた。作者が、史実をまげて、あえて佐久田を登場させたのは何故か。史実を探れば、そのような疑問が出てこざるを得ないことになる。そして、そこに創作の秘密もあつた。作者が、村長を時の村頭伊良皆ではなく、後の佐久田昌章にしたのは、佐久田が「行政の傍ら、青年指導にも力を入れ、二五才以上の青年で、△感化会△なるものを発足させたり、青年の士気高揚のため△多良間村青年歌△を作つて指導したりした。就任以来およそ三年、村の基礎づくりのために懸命につくした」（『市史』前出）といった、村民を、積極的に動かした人物であつたことによつていよう。小さな島で、何かを實踐していく上でうつつけの人物だつたとみたことにあるかと思ふ。

また、新校舎建築は、先に触れた通り、明治三十三年から始まり、明治三五年に落成している。落成式について『琉球教育』（明治三十五年五月、第七拾四号）は、「宮古郡多良間尋常小学校開校式」の見出しで、「その景況左の如し」として式の進行、住民の協力等について報じていた。また、明治三四年二月一日付『琉球新報』には、「多良間島学事一般（進藤栄）」として、次のような記事が掲載されている。

余が赴任の当時は人民多くは教育の何たるを弁せず世の開明に赴くを知らず専ら守旧の風ありき而して其校舎は明治二十四年平良分校として設立せられたる矮小の茅屋に（阿旦木の柱に薄き萱の屋根）□其後二十六年独立尋常校となりたるも依然旧態を改めず加ふるに敷地は村中の凹所なれば降雨の際は校の内外雨水の為め浸さるゝこと二三尺にも上ることあり剩さへ暴風吹けば全棟倒るゝこと屢々なるより島民の之か改築修繕に苦心すること少なからず年々為めに要するに人夫実に幾千人の多きに上れり身を育英に託するもの誰か斯る有様を座視し得へきや余は於之自ら乏しきをも省みず挺身校舎新築の挙に従はんことを以て期する

記事はそのあとに「一郡財政の困難なるより急に其機運に至らざりしも」と続けていて、財政面での問題等があった、すぐに新築が始まったのではなかったことがわかるが、進藤校長が、赴任当時から、最悪な教育環境を座視できず「校舎新築の挙に従はん」と決意していたこと、さらには、『琉球教育』（明治三〇年七月三十日、第十九号）に発表した「修身教育の実験に就きて」のなかで、数え歌の有効性を説くと同時に、「多良間の一小島の卑見のみ」としながら自作を掲げ、その八「公益」で「八ツトヤ やがて開けむ、宮古島く、いつ迄頑固で、済む者かく」とうたい、村民の啓発を積極的に推し進めていこうとしていたことなどを知れば、あえて史実によることもなかったのである。

新任校長の「育英に託するもの誰か斯る有様を座視し得へきや」という思いを重視すれば、史実は二の次であったといつていい。

明治三五年の出来事を、明治三一年にしたのは、しかし、単に村頭の手腕や校長の意向といった個人的な問題からだけでなく、当時の社会的な動きや教育の変革といったことも関わっているように。

明治三一年七月一九日付『琉球新報』は、次のように報じていた。

明治三十年の本県学事の状況を見るに其事項の重要な者は、初等教育に関しては、新設公立小学校に、両陛下の御真影の複写及教育に関する勅語謄本を拝載せしめ各郡区小学校設置区域を改正して就学児童の通学に便ならしめ且管理周到訓育慰篤を期する為、校舎新築改築の場合に於ては、成るべく一校内における児

童数凡そ十級を越えざらしむることにし、(中略)就学児童の数、日に月に多を加へ、校舎に狭隘を告げ
本年中新築或は改築、増築せしもの十二校、分教場を設置したるもの六個なり。

明治三〇年には、そのように、校舎の新築、改築、増築が多くみられるようになっていたこと、また、同年三月
二九日公布され四月一日に実施された「沖縄県間切島吏員規程」、翌三一年一月二〇日公布された「沖縄県間切
島制」による地方自治制度の改革により「間切島はその決議機関たる間切会・島会を持つことになり、従来予算
協議会より一歩前進した自治機関となった」(『沖縄県史 別巻 沖縄近代史辞典』)といったように、社会が大き
く動き出していたのである。その動きに合わせるかたちを、作品はとろうとしたのである。

史実と異なるという点では、さらに際立った場面があった。

新校舎の建築が計画され、それに必要な物資が運ばれてきた船に密航者が乗っていて、それが校長の姪であった
というようにしたことである。もちろん、これも検討しなければならないことの一つだが、たぶん、史実には記さ
れてないことである。

作者が少々破綻を恐れず女性の密航者を思いついたのは、作品に、島の若者たちの友情や恋を織り込みたいと
いう思いがあつたことだったにちがいないのである。

そしてそれは、ともすれば、よそ者を排斥しがちであるとみられがちな孤島が、決してそうではないということ
を、示すためでもあつたのではないか。

譜久村は「阿母島」を、『日本残酷物語 貧しき人々の群れ』の冒頭にある、水納島について書かれた文章の要
約からはじめていた。島の故事に、「貧しさゆえに、船の遭難を願ひ、難破すれば積荷を略奪して生活の糧にした

という、悲惨なむかし話」があり、島の東部にはその「祈願所跡があつて、外来者に見せるのはタブーである」と聞いているが、そこから10キロほど離れたところにあるのが「阿母島」だ、と書いていた。

譜久村が「阿母島」を、水納島に関わる話から始めていたのは、水納島の人々が、いつのころからか、多良間島を、「お母さん」の意である「あんなしま」と呼ぶようになった、ということにあつた。

多良間は、水納島からすると確かに母島を意味する「阿母島」であつたに違いない。しかし、「阿母島」も、水納島の古事に見られるほどではなかつたにしても、貧しかったことに変わりはなかつたであろう。作品を『日本残酷物語 貧しき人々の群れ』の水納島に関する要約から始めたのも、そう思つたに違いないからであり、「貧しさゆえ」の物語には、島は事欠かなかつたはずである。

しかし、「阿母島」は、そのような話は一切消され、外来者を快く迎え入れ、協力していく村人たちの活気にみちた話にしていく。

その一つひとつが、先に挙げたエピソードには見られるが、最も活気に満ちた一齣が、校舎新築に関する話し合いの場面である。村の有志が集まつた場で、渡久山長老が「村長さん、校長先生、はじめに云うのじゃが、わしらは県庁の力を借りんことにきめましたよ」という。この発言こそ、島が元気であることをよく示すものであつた。そしてそこに、作者が、この作品に込めた意図もあつたといつていいだろうし、あえて史実をまげた理由も読み取ることができよう。

渡久山長老の言葉は、「佐久田村長と進藤校長の考えを根底からくつがえすものであつた」と作者は書いていた。村民の指導に積極的だつた村長も教育環境の改革に身を投じた校長も、県庁を頼みにしていた。彼らの交渉は実を結んだといつていいが、それは、渡久山長老たち、村の有志の意にかなうものではなかつた。渡久山長老は、県庁

の力は借りないといったあと「だいたい二千五百円の金を使うて、松材じやと、カヤ葺きじやと、それに土間とは何じや。あまりに多良間を馬鹿にしとる。そんな死金を使う連中の助けは借らんでもよい。とまあ、こういうことになりましたのじや。だけど、心配せんでええ、学校は建てにやならん。わしらの方でやることに決めましたわ」というのである。

そして、村民の協力で、校舎は立派に建てられ、落成式を迎え、落成を祝う歌が歌われ、作品は大団円を迎える。大切なのは、渡久山長老の言葉が、新校舎建設をめぐる話にとどまらないということである。それは、現在の状況を切り開くための言葉にもなっているということである。何かをしようとするとき、すぐに政府に泣きつく。そんなことはやめろ、と。要求通りにいかないのなら自らたちあがるしかないと考えた、渡久山長老たち村民の決断を見ろ、と、いつているように思われるのである。

進藤校長と佐久田村頭に出来たのは、「県庁」を動かして、「許可」をもらうことだった。そして与えられた「金」で、事を行うというところまでであった。しかし、村民は、それでよしとしなくなっていたのである。進藤校長、佐久田村長によって動き出した校舎新築計画は、やがて彼らの思いをはるかにこえて、村民を団結させていたのである。小さい島でも、力を合わせれば出来ないことはない。ここに譜久村は、力点をおいていたといっている。譜久村は「阿母島」だけでなく、「阿母島」に収めた作品の全部を、多良間と関わるかたちで書いているのだが、小さな島に彼が固執したのは、小さな島こそ、人間のありよう、生き方を鮮明に映し出すことができる、考えていたからであろう。史実にあることを、史実通りではなく描いていく自在さが、譜久村雅捷の「阿母島」の魅力であると同時に、それができたところに、島の文学の魅力もあった。

最後に、一つだけ、補足しておきたいことがある。

「阿母島」は、すぐにわかる通り、実在の島「多良間島」を下敷きにして書かれていた。それは、先に示した十九のエピソードからも明らかであるが、「多良間島」ということになれば、書き落とせないと思われるものがあつた。島に伝わる「八月踊り」である。

「八月踊り」については、永積安明の『沖繩離島』に詳しい。永積はそこで、「毎年旧八月になると、二つの字の幹事が集つて、祭りの日どりをきめ練習が始められる」ことから、第一日目の儀式、第二日目の儀式、三日目の「わかれのひ」の最終日まで、「予行演習の日をあわせて四日間にわたる豊年祭」の式たりを述べ、舞台で演じられていく演目、および、演目の来歴に及んでいくが、その前に「予行演習の日をあわせて連日四日間、島をあげての祭典が終りを告げるとき、旧八月の月が福木の葉の密生した繁みの間を洩れて踊り場に注ぎ、神々は村びとの奉納をよみし、豊年は感謝され予祝される。こうして、村中の老若男女をあげての交歓・祭典は、めでたくその幕をとじるのである」と、書いていた。

多良間島にとつて、「八月踊り」は、まさに島の「祭典」であるといつていいものであるが、「阿母島」は、そのことについて、触れることをしてないのである。

何故か。「八月踊り」を取り入れるということになると、他の十九のエピソードと同じというわけにはいかなくなる。島を二分して行われる島最大の「祭典」である「八月踊り」を、加えるということになると、主題の拡散とといった問題が起ころざるを得なくなる。校舎建設という住民の総意になる活動がかすんでしまわざるを得ないということになるのである。その結果として、「八月踊り」は、見送られたのではないか。そしてそれはまた、「阿母島」が、「多良間島」の習俗を書こうとしたのではない、ということでもあつた。

理想の孤島とでもいつていい物語、それを目指したのが「阿母島」であつたのである。